

軟式野球部

設立	1964年
部長	池原 雅章(電子工学科)
部員数	29名(2013年6月現在)
OB/OG 会代表者	宮田 輝之
OB/OG 会会員数	393名
URL	http://keio-rikonan.jimdo.com/

はじめに

当部は「首都学生軟式野球連盟」に加盟し春季・秋季の公式リーグ戦での優勝、さらに上位大会にあたる全日本学生軟式野球連盟主催の全日本大会(春季)、東日本大会(秋季)への出場ならびに優勝を目指して活動しており、これまでに全日本大会ベスト4、東日本大会準優勝などの成績を上げている。

首都学生軟式野球連盟には、当部の他に青山学院大学理工学部、芝浦工業大学、成蹊大学、東京工科大学、日本大学生物資源科学部が加盟しており、これらを相手に上位大会である全日本大会、東日本大会への出場切符獲得を目指して、日々技術向上のため練習に取り組んでいる。

日頃の活動

当部の日頃の活動は主に矢上グラウンドで行われ、授業期間中は土曜日に週1回の全体練習、その他の平日には授業の無い時間枠を用いての自主練習、長期休暇中は週4日の練習といった活動をしている。長期休暇中の練習及び対外試合には、東京都品川区の大井埠頭中央海浜公園野球場を使用するなどして日頃に行えないプレーの練習に努め、チーム力向上を追求している。他に、リーグ戦を勝ち抜くための技術力向上と結束力強化を目指して、春、夏に年2回の合宿を行い、日々の練習に加えて短期集中的に練習をする機会としている。

ここ数年は、明治大学、立教大学、早稲田大学、法政大学、中央大学や他大学軟式野球部との練習試合を活発に行っており、試合を通じて練習成果の確認、課題抽出するなどの効果を上げ、リーグ戦における好成績に結びつけている。

また、常時マネージャーが所属・参加してお



第34回全日本学生軟式野球選手権大会
2011.8.21.

り、練習中のタイムキーパー、各種補助、試合中のスコアの記録および投球・バッティングフォームの撮影・記録などを通じてチーム・選手を強固に支え、選手がプレーに集中できる環境作りに努めるなど、部の運営における重要な役割を担っている。特に練習後や試合後のミーティングでは、選手目線ではないマネージャーとしての客観的視点からこそその意見・指摘をすることが多々あり、選手の意識づけを促すなどの大きな成果を上げている。

現在、当部には高校野球経験者から全くの初心者までさまざまな部員が在籍し、野球が好きで集まった仲間として、選手・マネージャーが一体となって“勝つ野球”の楽しさ、喜びを分かち合うために日々有意義な野球生活を送っている。

創部当初から永遠に存続する部を目指してきた中で、現役部員もその長い歴史を継承していく立場にあり、これからさらに当部が興隆していくことを意識しての活動を心がけている。

活動の歴史(創部期)

慶應理工学部の前身藤原工業大学予科にも軟

式野球部があった。藤原工大軟式野球部は全関東野球連盟に所属し、全関東軟式野球大会や、対早大理工科定期戦に参加し、さらに校内野球大会を主催したという記録が残されている。しかし、戦災とこれに移転などで活動は中断してしまった。現在の軟式野球部は、1962年に高校時代の同級生が集い軟式野球をやろうということからその歴史が始まった。

現在に続く部の創立物語は創部期の部誌(1965年発行 フェニックス創刊号)に以下のように記されている。

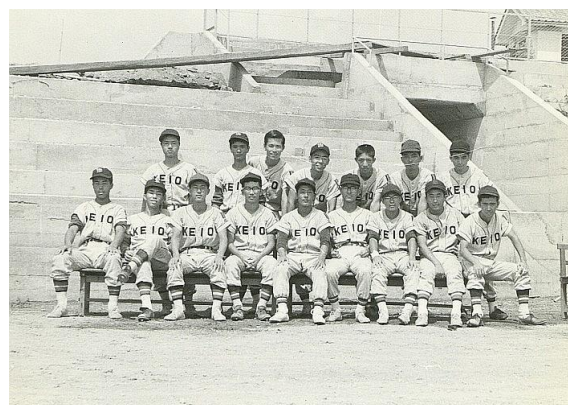
「昭和36年の慶應義塾高校3年C組には野球の好きなものも多く、3年B組などと試合をやった。それが37年3月高校を卒業し、大学に入ってから、3年C組のコンパの際に担任の先生に贈った記念品を届けるためその先生のお宅を訪問し、まあ上がって話でもというわけで種々話をしている中に野球の話になり、その先生の家の近くに良いグラウンドがあったが、それなら先生が知り合いの人に頼めば平日なら借りられるから野球でもやったらというわけで、それはよいから野球のクラブでも作ろうということになり、旧3Cの面々を集めて軟式野球をやる団体を作った。

それで集まったのが1年の人達全部で20名程度だった。」

最初は野球好きが野球をするために集まったというのが当部の始まりである。この年の活動は日吉を拠点とするものであった。

また、『こうして野球を行うからには単なる遊びの野球でなく大学時代軟式野球をやっていましたと言っても恥ずかしくないだけの力を着け遊びの野球の面白さではなく、一つのスポーツとしての野球の面白さを知るために高度の技術、チームプレーなどを練習により体得するという目標を立て、練習第一主義を徹底し、うまくても練習に出てこない人は試合には出さず、チームプレーは練習を通じてのみ得られるという方針で部の活動を始めた。』とあり、この方針・考えは現在のチームにも引き継がれている。

チーム結成に当たりクラブ名を“永久に死せず!”の考えから“フェニックス”と命名し団体登録が行われ、この翌年(1963年)、中心部員が



1964年 夏合宿 長野県小諸市営球場

2年生になることにより主たる活動拠点が日吉から小金井に移ることとなった。

初めての合宿を千葉県野田市で行うなど練習・試合に励んでいた。

この時期には日吉と小金井の双方、そしてやがては三田にもフェニックスを組織し、それぞれがある程度独立して活動し、定期試合などを通じて競いあうといった構想もあったようだが、部員募集・人数の問題、創立時のメンバーが小金井に集中するなどの現実もあり実現には至らなかった。

その後に練習場所の確保、部の存続を願う思いなどから軟式野球部として工学部体育会に加盟する運動が開始され、まずは1964年夏頃に工学部体育会への準加盟が認められユニフォームもKEIOに作り替えた。

また、準加盟工学部軟式野球部として小金井にて早稲田大学理工学部軟式野球部と初めての慶早理工戦を行い、双方関係者総勢50名ほどが小金井グラウンドに集まった。

この秋には慶應義塾大学SLC、早稲田大学理工学部、早稲田大学政経学部の野球チームと4チームにてリーグを結成、リーグ戦活動を始めることとなった。

このリーグは、後に法政大学工学部を加えた3大学5チーム構成、中央大学、日本大学芸術学部参加による4大学6チーム構成の時代を経て、最終的に慶應義塾大学工学部、慶應義塾大学SLC、早稲田大学理工学部、早稲田大学政治経済学部、明治大学農工学部、日本大学芸術学部による4大学6学部・チーム^注のリーグ構成



1964年 第一回慶早理工戦

へと発展、途中運営面などで困難な時期を乗り越りつつ 2000 年代中頃まで活発に活動を継続するものとなった。

法政大学が参加したときには、東京六大学工学部軟式野球連盟の結成を目指す動きがあったが、当時、東京大学および立教大学にクラブが存在せず断念、連盟結成は幻に終わったとの話がある。

そして、1964年の秋、軟式野球部として正式に工学部体育会の16番目の団体として加盟が認められ、今に続く活動の基盤ができた。

(注：各大学の学部名はリーグ結成当時のもの)

小金井～矢上 移転期

当部の創部45年記念式典にて前田丈夫OB/OG 会長古屋支部長(応化27期)より現役選手に向けてのスピーチに、小金井時代の理工体の矢上への移行に関わる興味深い内容があったのでここに紹介する。

「省みれば野球部に在籍した小金井での1966年から3年間は慶應工学部体育会軟式野球部(当時)の黎明期にあたり改めて感慨深いものとなった。創部数年の課題が山積した時期であったが先輩、現役諸氏が若さに任せて猪突猛進した青春のひとこまといえる。部の活動と並行して、当時1年間だけであったが工学部体育会委員長として工学部体育会二十数団体の総額支給資金7万円を三田体育会本部へ受け取りに行ったことや、体育会代表として安西前塾長(当時工学部体育会ラグビー部、体育会副委員長)と工学部日吉移転でのグラウンド確保のため、塾教授

との交渉と、ともに汗を流したことが懐かしく思い出される。「継続は力なり」文武両道の範として理工学部体育会軟式野球部が今後も益々発展するよう切に祈って止まない。」

今も貴重な練習場所として使用している矢上グラウンドを確保するためにも、さまざまな先人の困難と苦労があったことが分かる。

この移転時期に軟式野球部においては、小金井、矢上と分離された拠点での活動となることと部員数が少ない時期だったことが重なるなどしたため、矢上から小金井に移動して参加する選手なしでは練習もままならず、一時チーム運営に大変な困難をきたす状態に陥ったとある。この創部以来最大の危機を迎え、現役選手自身の苦労はもとより、既に選手活動を退いた先輩達も相談を持ちかけられ、クラブ存続を願う気持ちからの励ましと協力をもって一体となり、これを乗り越えたとの話が残されている。

1970/80/90年代の活動

所属リーグでの主たる活動の他に、1990年代後半からは塾内トーナメントへの参加(それ以前は参加許可されず)、塾長杯ソフトボール大会への参加などをしてきた。塾内トーナメントでは代表として関東大会出場、ソフトボール大会でもベスト4、ベスト8などの恥じない成績は残したようである。

この他にも、まだ新しい頃の横浜スタジアムでの練習・試合開催、三田祭で焼きそば屋の出店、人気テレビ番組(ビートたけしのスポーツ大将)へ出場応募するなど楽しむことにも「積極的に」取り組んでいたことを示す記録がある。

創部期から1970/80/90年代を通じて、そして2000年代に入ってから春・夏に合宿を行い、集中して練習する機会を作ってきた。

春合宿は上級生が抜けた後で、まだ新入生などの新しい部員が入部する前のタイミングであることから、部員数が最も少なくなる時期の開催となるため、中身の濃い練習メニューを組むことに苦労した世代があったようである。春・夏ともに適切な合宿地を確保することも頭を悩



1971年 春OB戦 初代部長 菊池教授(右)と

ませる案件の一つだった。

夏合宿においては、1975年から36年に渡り二本松市の岳温泉にて行うことが続いた。二本松市営球場や地元企業の整備されたグラウンドを使用できた頃や、時代と共に球場そのものが少なくなり、条件の良くないグラウンドで練習しなくてはならない頃などもあったようだが、長い期間、当地で合宿を続けることができたことは当部の幅広い世代間で思い出を共有することとして非常に意義深い。卒業後、社会に出てからもOB/OGとして5年、10年と合宿に顔を出し続けた者も少なくなく、チームを愛する心と共に温泉の魅力につかれた者もあったと考える。

ただ、残念ながら2011年に起きた震災の影響で当地での開催を断念したり、グラウンド設備・環境の面で開催地を見直すなどしたこともあったため、彼の地での開催をそのまま継続とはいかなくなっており、OB/OGの中には残念に思うものも少なくないと思う。

ここにその思いを表すものとして、二本松岳温泉 扇屋旅館での合宿を最初にセットアップしたOB/OG会会長宮田輝之(1977年機械卒)が綴ったものを記す。

「創部40周年を前にOB/OG会を組織化するために現役学生にも参加してもらい、名簿の整備、年度幹事選任、記念式典の開催準備等にて何度も打ち合わせを実施した。

それまでは現役との接点もおそらく20数年途絶えていたのではないだろうか。

現役に“夏合宿はいまどこでやっているの?”と聞いたところ“二本松 扇屋さんです”との回

答に思わず“えー、まだ扇屋さんでやっていたの!”と声を発してしまった。

卒業後既に30年をすぎて、私がマネージャーのときに決めた扇屋さんでの夏合宿が、連綿と続いていたことを知りたいへん感激したことを思い出すのと同時に、学生の合宿所とはかけ離れた本格的な温泉旅館で、利益など度外視した費用にていまだに受け入れていただいている扇屋さんには感謝の言葉もない思いである。

私が日吉1年時同じクラスで仲の良い何名かでスキーに行くことになり、どこに行こうかとなったとき、友人の一人が、姉が嫁いだ旅館でスキーもできるということで行ったのが、この二本松岳温泉扇屋さんとの出会いだった。

それから毎冬居候のようにお世話になっていて、夏合宿もこのようなところでできればと思っていたところ、3年時にマネージャーになり夏合宿の場所を選ぶにあたり扇屋さんをお願いしたところ、気持ちよく引き受けていただいた。

さてグラウンドをどうするか。友人のお父上はなんと二本松市長、それも当時すでに4~5期の記録的在職期間を誇る全国でも有力な市長で、現在ではそのようなことは許されないが、当時



2010年 東日本大会 上柚木公園野球場



2008年 夏合宿 福島県二本松市
岳温泉 扇屋旅館



2009年 創部45年記念総会・式典
扇屋旅館(右)へ記念品贈呈

は市長の一声にて市営グラウンドにて合宿をおこなわせていただいた。夕立がきて川のように水が流れても、雨が上がるとスーと水が引く素晴らしい球場であったと記憶している。温泉旅館、市営球場の最高の待遇の合宿であった。

また当時は温泉街もにぎやかで、後輩の夜の温泉街での武勇伝も多々あったようだ。

お世話になった当時の美人の女将さんにお目にかかれるのを楽しみに、2004年(40周年の夏)夏合宿に扇屋さんにいった。当時と変わらない女将さんがいたと思った。が、それは当時私が学生のころ4~5歳だった娘さんで、女将さんは残念ながらその春病気でお亡くなりになったとのこと。

45周年記念にはご主人を日吉にお招きして記念の盾をお渡しした。扇屋さんのロビーのどこかにまだ飾っていただいているはずである。

震災復興支援の意味も含めて、扇屋夏合宿が復活することを祈ってやまない。」

本稿では宿名の表記を以前の“扇屋旅館”としているが、現在は“岳温泉 あだたらの宿 扇や”として震災直後の難しいときも乗り切り、以前にも増して評判の高い宿として営業を続けられていること、多くのOB/OGが嬉しく懐かしく思っていることをここに付記する。

近年の活動

当部は創部時から工学部・理工学部のみでなく他学部の学生にも広く開かれた部であり続けており、その歴史を通じて工学部・理工学部外の学生も多くが活動に加わりチーム内における重要なポジションを占めてきた。2003年度世代には4名の女子部員が在籍、選手として積極的に活動し、野球を楽しみ、常に前向きに練習に取り組む姿勢を通して他選手に多くの見習うべきものを示した。この4名の女子部員を中心にして女子野球チームのメンバーを募り関東女子軟式野球連盟への加盟、並びに“2001年度第15回日本大学女子野球選手権”に出場しベスト8の成績をあげている。ただこの頃には、創部初期より所属・活動を続けてきたリーグで、他所属大学・チーム部員減少による脱退・分裂などにより活動の継続が困難な状況に陥ってしまった。

当部においても部員が極端に減少し、再び存続の危機を考えざるを得なき状況となったが、“OB/OG会の立て直し・結束強化を図る”などしたバックアップ体制の強化、“首都学生軟式野球連盟加盟”による活発な活動の維持および“全国大会優勝”とした明確な目標を掲げるなどをしたことで、文武両道を志すやる気ある学生が多く継続的に集まるようになりこの難局を切り抜けている。

慶應小金井クラブ発足

当部OB/OG会は“慶應小金井クラブ”の名で現役選手の活動を強くバックアップしている。

ここに荒井徹OB/OG会前会長(1970年機械卒)が慶應小金井クラブの発足に到る経緯を記したものをあげる。

「1989年(平成元年)慶應義塾大学工学部体育会軟式野球部創部25周年、菊池教授(ドイツ語)退職記念の懇親会が日立金属和彊館にて開催され、軟式野球部創部以来部長を続けていた菊池教授が退職、新部長に金田一教授(ロシア語)が就任した。卒業後久々に多くのOB/OGの方々が集まり、小金井グランドでの野球話、現在の仕事に関する話等で楽しい懇親会になった。

1996年6月軟式野球部OBで小金井グランドで汗を流して野球をした仲間が新宿三井クラブに集まって、第1回小金井クラブ懇親会が開催され、その後年2回懇親会を開催し、ゴルフをする仲間が多いので、ゴルフコンペも開催することになり、前日に宿泊して懇親会を行い、翌日ゴルフコンペを行う、ゴルフ工学研究会が発足し、年に数回開催された。2001年4月、銀座BRBクラブハウスで開催された小金井クラブが最後となり一時中止となったが、ゴルフ工学研究会は続けられ、創部40周年を記念し、多くのOB/OGを集めて、OB/OG会組織を作ることになった。

2004年2月に創部40周年記念懇親会が東京三田倶楽部(帝国ホテル内)で開催されて、多数のOB/OGが集い、その会合で、慶應義塾大学工学部体育会軟式野球部OB/OG会の名称を「慶應小金井クラブ」とすることが承認され、部長に川口教授が就任した。2007年東京三田倶楽部において、第1回慶應小金井クラブ総会が開催され、年1回総会を開くことが決まり、2008年日吉ファカルティクラブラウンジで慶應小金井クラブ総会が開催され、毎年3月に開催することが決まった。

2009年創部45周年祝賀会、総会が開催され、軟式野球部が大変お世話になった方々を招待して懇親会が開催され、部長に美浦教授が就任した。現在の名称は、慶應義塾体育会矢上部軟式野球部OB/OG会、慶應小金井クラブとなった。」

総会および定期的祝賀会は、毎年度卒業生を送る時期に親睦会を兼ね、現在も継続して開催しており、毎回各地より多くの仲間が集い、選手/マネージャー達の卒業および慶應小金井クラブ入会を祝う場としても大いに盛上っている。



2009年3月 創部45年記念総会

2013年3月の総会では、任期満了による小金井クラブ会長の交代、池原教授(電子工学科)の4月よりの部長就任が報告され、創部50年の節目を迎える新しい体制となった。

卒業後の関わり

創部45周年を迎えた際に、慶應小金井クラブの立場から現役選手活動の戦力強化を助ける者を配置し、活動資金補助や祝賀会開催などを通じてのバックアップのみではなく、日常の練習やリーグ戦の場面でより深く関わる場を増やし、学生とOB/OG会のより強固な結びつきを成すべきとの意見があがった。これにより“現役強化担当”役を設置、日頃の練習を通じてのサポート活動を継続している。そして、より強いチーム作りを目指すためとして“チーム目標に一貫性を持たせる手助け”の役割も担い、“未来への先導者たらん塾生の育成”にOB/OG会も携わっていくとの姿勢を示し、現役選手の活動支援を続けている。

また、卒業後も草野球などを中心に選手として長く活動を継続する者が少なくなく、在学中に全日本大会を目指した部員たちの野球への想いは強い結束を生み、その結束が卒業後も続くものとなり、当部OB/OGで草野球チームを結成し活動する形で見られることもある。

その中に、2008年および2010年に東日本学生軟式野球選抜大会に出場した世代を中心に2012年にチームを結成、ほぼ毎週末、多くの元部員たちが集い学生時代のように熱い思いで

野球に取組み、GBN 全国草野球大会への参加を通じ全国レベルのチームとの対戦を楽しんでいるなどの例がある。

このチームには選手時代にレギュラーとして活躍した選手のみならず、控え選手としてチームを支える機会の多かった元部員も加わり、ここぞとばかりの活躍を見せているようである。

むすび

創部期の昔から今に続く当部の姿として、現役時代に一緒に活動した仲間のみならず、異なる世代の OB/OG たち、および現役選手たちとも強い結びつきを通じて良い関わりを続けて来たことがあり、幾度かの困難を切抜けてきた原動力の一つとなっている。最後に、全 OB/OG ならびにさまざまな面で協力頂いた方々への感謝とそれを讃える意味で当部前身フェニックス初代主将 谷元光之(1966 年計測卒)の言葉をもってまとめとする。

「軟式野球部にエールを送る

谷元 光之

軟式野球部 50 年を越える歴史は偶々こぼれ落ちた種が多くの人々の情熱と努力で大木になった気がする。

部員や対戦チームの減少、校舎の移転、グラウンドの確保など種々の問題に直面し、部の維持・存続が困難な時代もあった。現役部員の努力と OB/OG のサポートによりこれらを乗り切った。これからも軟式野球部は現役部員と OB/OG が一層結束し、不死鳥のごとく脈々・隆々と羽ばたいていこうではないか。」

補遺

編集部は 2012 年 4 月に理工学部総務部倉庫において、数枚の 50 銭紙幣と共に藤原工業大学予科軟式野球部会計簿を偶然発見した。写真にあるように、ボール、バット、ベースなどを購入した費用が記録されている。

また、「藤原工業大学豫科會會務報告」(1941 年 3 月)には、藤原工大軟式野球部は 1940 年 7 月に結成され、監督に細井を迎えたことが記されている。10 月には全関東軟式野球連盟に加入している。「會務報告」ならびに「藤原工業大学豫科誌創刊號」号には、軟式野球部の活動が記録されている。1930 年には、伏見球場で「NBC」および「ミドリ」と対戦している。早稲田理工との第 1 回定期戦は新田球場で行われ、10 回までの延長戦で勝利を収めている。1941 年には日吉、下井草、豊島園などの球場で、「正則 OB」、「阿佐ヶ谷」、「扶桑」などのチームと試合を行い、早稲田理工との定期戦も行われている。1941 年 9 月 28 日には、軟式野球部が主催して藤原工大校内野球大会が開催されている。

日付	品名	収入金額	支出金額	差引残高
1 17	前期繰越	34.43		34.43
" "	報國團町	25.00		59.43
1 17	ボール代 (96球)		11.52	47.91
3 27	ボール代 (113球) 19=2		13.56	34.35
4 18	ボール (80球) 24個		19.20	15.15
" "	バット 2個		5.40	9.75
" "	ベース		20.00	-10.25
5 4	会場費(萬寿)		2.00	-12.25
5 "	ボール (80球) 15=2		7.60	-19.85
5 10	" 24個		19.20	-39.05
5 16	報國團町	39.05		00.00
5 24	"	19.20		19.20
	保安費(市京)	4.10		23.30

1941 年 1 月の日付のある、藤原工業大学予科軟式野球部会計簿

軟式野球部活動の歴史

年度		主将	活動		成績		合宿		
西暦	和暦		所属	参加チーム	春	秋	春	夏	
1962	S37	谷元 光之					---	---	
1963	S38	谷元 光之					---	千葉県野田	
1964	S39	西本 稔		早稲田(政経、理工)、 慶應(工、SLC)	13勝9敗		横須賀市 観音崎	長野県小諸	
1965	S40	森 繁彦		早稲田(理工、政経)、 法政(工)、 慶應(工、SLC)	---	---	静岡県掛川	長野県小諸	
1966	S41	内藤 寛昭		早稲田(政経、理工)、 慶應(工、SLC)	---	優勝	静岡県菊谷	長野県小諸	
1967	S42	荒井 徹	東京四大学 リーグ	早稲田(理工、政経)、 中央、日大(芸術) 慶應(工、SLC)	---	---	静岡県吉原	長野県小諸	
1968	S43	近藤 孝則			優勝	---	千葉県茂原	千葉県白里海岸	
1969	S44	工藤 栄一	新東京四大学 リーグ	早稲田(理工、政経)、 明治、日大(芸術) 慶應(工、SLC)	---	---		長野県塩尻	
1970	S45	織田 信雄			---	---			千葉県銚子
1971	S46	熊野 義夫			---	---			長野県飯山
1972	S47	酒井 要			---	---		岡山県岡山	千葉県
1973	S48	清水 文雄			---	---		千葉県銚子	長野県信州中野
1974	S49	渡辺 勉			---	---		茨城県日立	千葉県大原
1975	S50	勝野 哲			---	---		静岡県伊豆北川	
1976	S51	石川 博			---	---		千葉県大原	
1977	S52	三輪 祐司			準優勝	---		千葉県大原	
1978	S53	戸高 善之			準優勝	優勝		静岡県藤枝	
1979	S54	小嶋 敏雄			優勝	準優勝		静岡県藤枝	
1980	S55	竹内 正彦			---	準優勝		千葉県銚子	
1981	S56	苅谷 浩幸			---	---			
1982	S57	勝野 博			優勝	優勝		茨城県潮来	
1983	S58	川地 俊一			---	優勝		静岡県清水	
1984	S59	増田 敏幸			---	---		東京都伊豆大島	
1985	S60	内田 賢	---	---		千葉県鴨川			
1986	S61	渡邊 一彦	優勝	準優勝		茨城県潮来			
1987	S62	岡本 圭史	---	優勝		千葉県白子			
1988	S63	林 敏行	---	---		千葉県白子			
1989	H1	本江 亮育	---	---		千葉県白子			
1990	H2	神谷 三好	---	---		千葉県銚子			
1991	H3	安部 毅	早稲田(理工、政経)、 明治、日大(芸術) 慶應(理工、SLC)	---	準優勝	千葉県白子	福島県 二本松岳温泉		
1992	H4	前原 一裕		---	準優勝	静岡県伊豆長岡			
1993	H5	丹野 弘朗		---	優勝				
1994	H6	田巻 虎生		優勝	優勝	千葉県蓮沼			
1995	H7	小森谷 貴基		優勝	---	千葉県白子			
1996	H8	西 茂樹		---	---	千葉県白子			
1997	H9	加藤 秀臣		---	---	茨城県波崎町			
1998	H10	鈴木 敦司		---	---				
1999	H11	長谷川 宗史		---	---				
2000	H12	坂谷 敏宏		---	---				
2001	H13	坂谷 敏宏	---	優勝	茨城県波崎町				
2002	H14	徳毛 一晃	---	---	茨城県波崎町				
2003	H15	嶋田 良昭	---	---	静岡県伊豆				
2004	H16	関田 航	早稲田(理工)、 明治、日大(芸術) 慶應(理工、SLC)	優勝	優勝	静岡県御前崎			
2005	H17	松下 俊太郎		---	---	静岡県南伊豆			
2006	H18	井上 大輔		---	---	茨城県波崎町			
2007	H19	前田 健人		---	---	茨城県波崎町			
2008	H20	小野寺 俊太	慶應(理工)、成蹊、 青山学院(理工)、 日大(生物資源)、 芝浦工大、東京工科、 横浜商科	---	準優勝	---			
2009	H21	内藤 雄輝		---	---	茨城県ひたちなか			
2010	H22	園尾 大地		準優勝	準優勝	千葉県千倉町			
2011	H23	奥田 亮介		優勝	---				
2012	H24	那須 尚樹		準優勝	---				
2013	H25	小山 莊平		---	---		新潟県魚沼		